# 第五部　信仰生活

問64　キリスト教生活の基本精神は何ですか。

答　わたしは神によって造られ、キリストの恵みによって救われたのだから、わたしの生命も、時間も、能力も、富も、全存在が神のものであるという精神です。

このことは第一に、わたしたちは神の恵みの下に生かされているのだということを意味しています。わたしたちは自分の力で立っているのでも、生きているのでもありません。神の恵みがわたしを支え、立たせ、生かしているのです。ですから、神の恵みがすべてのすべてであることを忘れてはなりません。

第二に、わたしたちは全生活をもって神に感謝し、神の栄光をあらわす証しの生活をしなければならないということを意味しています。わたしたちは依然として神以外のものをたよりにしたり、自分のためのみに生きたりします。しかし、この反抗の生活は長続きするものではありません。まもなくその非をさとされます。ですから、たいせつなことは、気がついたらすみやかに悔い改め、神に立ち返り、再び新しく神中心の生活をやり直してゆくことであります。

このように、くりかえし悔い改め、自分に死んで神によみがえるダイナミックな生活を続けてゆくところに、キリスト教生活があるのです。（ローマ一二・一―二）

**問65** 人はおこないによってでなく、めぐみによって救われるというのでしたら、よいおこないはする必要がないでしょうか。

**答** 「おこないによってではなく、めぐみによって救われる」という教えは、いちばんたいせつなところであり、わたしたちはこの教理をしっかりとつかんでおかねばなりません。

しかし、この教えはよいおこないを軽んじたり、否定したり、さらには人間が罪を犯しつづけ、罪にとどまることを是認しているのでは決してありません。ただ、どんなよいおこないも救いの条件や功績にならないのであって、少しも誇ったり、よりたのしんだりしてはならないということを明らかにしているのです。

自分のために少しも役立たないならば、よいおこないに励むはりあいがないといわれるかもしれませんが、そういう自己中心的な考え方そのものがまちがっているのです。わたしたちは

それとまったく違った源泉から、よいおこないへのエネルギーをくみとろうといたします。すなわち、神の恵みに対する感謝の応答としてです。

いったい、神のめぐみによって救われたことを知った者は、このめぐみに対してこたえてゆこうという誠実な心を当然持たせられます。そのまったく純粋な応答という心が、神を愛し、人を愛するおこないとなるのであって、このような行為を少しも生んでゆかないような信仰というものはありません。もしあったとしたら、その人ははなはだ怠慢で、恵みを空しくしているといわねばなりません。（ローマ六・一―二、ガラテヤ五・一三）

**問66**　よいおこないとはどんなおこないですか。

**答**　神に喜ばれるおこないのことです。したがって、それは人間が考えた善悪の判断によってでなく、神が自ら定められた基準によってその善悪を判断しなくてはなりません。わたしたちはその基準をまず十分に正しく知らねばなりません。

その基準が有名な十戒であります。（出エジプト二〇・一―一七）。

神はこれをシナイ山でモーセを通して啓示されました。このように神はモーセを通しておこ

ないの外的な基準を定められましたが、さらにキリストを通して、おこないの内的な基準を示されました。それは利己心のないおこないでなくてはならないということです。（問16参照）

表面上から見てどんなにおきてにかなった立派なおこないであっても、人によく思われようとか、神からむくいをうけようとかいう自己中心的な動機でなされた場合は、人の心のうちを見られる神に喜ばれません。神はそのような利己心が全くなく、さらに何ものにも強制も束縛もされずに、喜んで神を愛し人を愛してゆく自由な愛のわざを求められるのです。この二つの基準をかねそなえたおこないが、ほんとうによいおこないといえるものなのです。（コリント第一、一三・一―三）

**問67**　十戒の第一の戒めは何を教えていますか。

**答**　「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」と教えてあります。

すなわち、イエス・キリストにおいて示された神のみが神であって、わたしたちはただこの神のみを拝し、他のいかなるものにも心をゆだねてはならないということです。

この神は天地を創造し、支配し、救済される唯一の主なる神でありますから、わたしたち

は、よき日にも悪しき日にも、いかなる状況のもとにあってもこの神を信頼し、この神に祈り、真心から仕えて、いかなる偶像、迷信的ご利益、易うらないのたぐいにも心迷わされることのないようにしなくてはなりません。なぜなら、それらのものはみな神でなく、ただわたしたちの心を迷わす誘惑にすぎないからです。また、人間の理性とか、科学の力とか、富や自分自身などを絶対化して、それをたのみにしてはなりません。それらはみな必要なものではありますが、有限な被造物であって、創造主ではないからです。（ローマ一・二〇―二三）

わたしたちは、地上にあるすべてのものの主である、目に見えない、唯一の神に絶対忠誠を守って人生を貫いてゆかねばなりません。ほんとうの祝福はそこにあります。

問68　第二の戒めは何を教えていますか。

答　「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である

から、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三四代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう」とあります。

神は天地の創造主であって、被造物の一つではありませんから、天地にあるいっさいを超えた、見えない、しかも自由な主であります。また神と地上にあるものとの間には同化しえない区別があります。

ですから、わたしたちはこの神を、何かの形や似姿や概念や世界観など、地上にあるものや人間が造ったものの中にとじこめたり捉えようと試みてはならないのです。そのような形で捉えうるものは神ではなく偶像であります。神を像でとらえ得たとすることは、神の無限に高い栄光を偶像までひき下ろすことであり、大いなる冒瀆であります。

しかし、この戒めは、キリスト教的な彫刻、絵画、また神学的思索などが全般に禁じられているということではありません。ただ、あたかも神がそこにいますかのようにその前でひざまづき、祈ったりすることが禁じられ、また、神を概念で規定したり、勝手に自己流に神の観念をでっちあげたりすることが戒められているのです。したがって、礼拝の目的で像を作ったり、持ったりすることは、どんなものであってもいっさい禁じられております。彫刻、絵画、神学などは、ただ見えない神を証しするための（欠点の多い）道具にすぎないことが忘れられてはならないのです。（使徒一七・二二―三一）

問69　教会堂には本尊とか、御神体というようなおがむものがありませんが、それではどのように礼拝をするのですか。

答　前の問で申しましたように、まことの神は目で見ることができません。見えるものは神ではなく被造物です。ですから、神をどんな形にせよ見える姿に表すことはできないのです。しかし、見えないから礼拝ができないかというと、そうではありません。というのは、神はものいわぬ偶像によってではなく、聖書にもとづく神の言の説教と聖礼典によってわたしたちの間に臨み、語りかけられるからです。（問12参照）

わたしたちはこの言をきくことによって神との交わりを与えられ、きわめて霊的に神を礼拝するのです。ですから、本尊とか御神体のようなものがあると、かえってこうした霊的人格的な交わりが疎外されてしまうので、絶対に礼拝堂の中にはそのようなものは置かないし、礼拝のために使用もいたしません。（ヨハネ四・二一―二四）

問70　第三の戒めは何を教えていますか。

答　「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう」と教えています。

これは神をまごころから思うのでもなく、畏れや敬いも持たずに、考えたり、その名をかるがるしく口にしたりすることを戒めております。神について考えたり、口にしたりする時は、いつも神が生きてそこにいますことを忘れてはいけません。

この人格的関係を忘れて、神をまるで物体か何かのように客体化して取り扱うことは、神を冒涜することで、不敬きわまりないことです。わたしたち人間ですら、もし他人が自分のことを一人格としての尊敬もなしに、話題にし、俎上にのせ、手玉にとっているのを知ったならばたまらなく不快をおぼえるではありませんか。

ですからわたしたちはいつも神を取り上げる時、「祈りつつたずねる」という敬虔な態度で向かわねばなりません。

また、この戒めは、自分の欲望と必要をみたすために神の名を利用し、神の名を引きあいに使ってそれを正当化したり、達成しようとしたりすることを禁じております。神の名には力があります。この力を人間の目的のために私用することは大いなる罪であります。神の名は、た

だ神のみこころの実現のためにのみ用いねばなりません。

問71　第四の戒めは何を教えていますか。

答　「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうち、天と地と海と、そのすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」と教えています。

これは、日曜日を特に神のために用いよということで、教会での神礼拝と、愛の奉仕に用いるべきことを教えている戒めです。日曜日はまた、イエス・キリストが復活された日なので、「主の日」といいますが、この日、わたしたちは古い自分に死んで、主の復活にあずかり新しくされるのです。

ですから、わたしたちは一週間の六日をこの世の労働に従事し、七日目はあらたまった思いで迎え、仕事を休んで聖日らしく守らねばなりません。こうした経験をすることが霊的安息な

のです。日曜日も休まずに働くのは、勤勉なようですが、実は仕事の奴隷になることであり、やがては身も魂もほろぼしてしまって、神の祝福を失うもととなります。

人間のからだは、単にものを作る道具や機械ではありません。まして、金もうけ器でもありません。人間は神によって造られ、救いに向かって歩いている魂をもった存在です。一週間ごとに魂の洗いをうけ新生命にあずかっていなくては、真の人間性をも失ってしまうでありましょう。また、休日を娯楽などの感覚的喜びにのみ用いるレジャーの使い方も、魂を養うために使うことを怠ったやり方で、祝福されるとはいえません。

**問72** つとめのつごうやその他の理由で日曜日が休日でない場合はどうしたらよいでしょうか。

**答** 日本の現状では、たしかに日曜日が休日でなかったり、どうしても朝、教会にゆくことができない場合があります。このような状態は決してよい社会状態ではありませんが、無視するわけにもゆきません。痛みを覚えつつも、やはり仕事につかねばならないでしょう。

しかしこの場合には、教会にその旨をつげ、また例えば、朝、出勤前に今日は聖日であるこ

とを覚えて短い個人的な礼拝の時を持つとか、教会堂に立ちよって、祈りをささげてゆくとかまた、教会で礼拝が行なわれている同じ時間に、ひそかに職場で祈りの時を持つとか、朝の代りに夕拝に出席するとか、あるいは旅行中ならば旅行先の土地の教会に出席するとかして、何らかの形で教会の礼拝につらなることが必要であります。しかし、愛のわざに励むことについては、変りなく心がけねばなりません。

この頃は、日曜を休日にする商店もぼつぼつ出てきましたが、反対に日曜日にいろんな催しをする風潮もあらわれたりして、まだまだ完全休日というわけにはゆきません。わたしたちは神の戒めに従って、全日曜を休日とする社会体制が一日も早く実現されるように祈り、かつ、努力しなければなりません。

**問73**　キリスト教は職業についてどう教えていますか。

**答**　明らかに神の御旨にかなっていない職業、例えば売春婦、とばく師、やま師などでないかぎり、職業に貴賤はありません。

社会を造り、維持してゆくためには、いろいろな職業が必要です。大臣も清掃業もりっぱな

職業であります。わたしたちはそれぞれ、その人の適性や、学問や、技術、その他いろいろの関係によって、何かの職業につきます。場合によっては職業を変えねばならないこともありましょう。しかし、働いている時は、その職業を神の召しに答える責任の場と考え、力をつくさねばなりません。わたしたちは真空地帯では神に答えることはできません。神は必ず、働きの場所をお与えになります。その場所が職業です。自分の職業の中で神の召しに答えてゆきましょう。

**問74**　労働組合員であるキリスト者は、ストライキの時、どうしますか。

**答**　労働組合運動は、労働者の労働条件、生活の向上を目指し、経済、産業の民主化を目的としたもので、特に日本ではなんといっても、日本の民主化を促進する一つの役割をになっていると言えます。

経済、産業部門での民主化は、ただ経営者の進歩的良識や温情のみによっては達せられません。労働者自身の発言と要求の主張とに、十分に、場所を与えなければならないからです。このために労働者の団結権、交渉権、争議権は憲法第二八条によって承認されているのです。で

すから、キリスト者もこれに参加することをちゅうちょすべきではありません。ましてストを罪悪視するなどあやまりであります。

しかし、現状では、組合運動も多くの点で行き過ぎやあやまちを犯していることも忘れてはなりません。その原因の一つは、資本家と労働者の対立がはげしすぎることです。資本家は経営の合理化、生産性向上を目指して非常にきびしく攻勢に出ております。組合側もこれに対して必死で対抗しています。また、組合運動にはマルクス的階級闘争のイデオロギーがかなり幅をきかせていますし、日本の労働運動はまだ歴史が浅いので、組合員の意識が低く、十分に訓練されておりません。

ですからストライキに加わるか、加わらないか、また、どういうストライキをやるかということは一律に論ずることはできないことで、キリスト者一人一人の決断にゆだねられなければならないと思います。ただ、わたしたちはキリスト者として、日本の社会に責任を負っている者なのですから、労働運動に対して自分はどう処するか、といった個人倫理的な態度ではなく日本の労働運動の正しい発展と育成のために、どう貢献すべきかという姿勢でとりくむべきであります。このためには、キリスト者労働者同志の間で、できるだけ話しあうようにしなければなりません。

問75　キリスト教は、資本主義と共産主義のどちらに味方しますか。

答　資本主義は自由尊重の精神から生まれた経済原理です。自由を尊重することはよいことです。ところが自由の尊重は、利潤の無限追求に拍車をかけるようになりますので、その発展期においてはさしたる矛盾もないとしても、今日のような資本主義の円熟した時代になると、さまざまの弊害を生んで来ております。

例えば、資本家同志の競争から来る独占資本の誕生、利潤追求から来るモラルの低下、搾取貧富の差の増大などであります。こうしてこの自由の原則は、人間は、神の創造なる富を共に喜んで生活してよいという平等の原則を破壊してしまう結果となったのです。こうした矛盾と害悪は社会主義運動を招来し共産主義を生みました。

共産主義は労働者の利益を擁護する立場から生まれ、平等の原則の上に立って、あらゆる生産手段、富を共有し、私有を否定します。共有とは国家による管理でありますから、したがって、この制度は全体主義体制を強化する形となり、個人の自由はいちじるしく否定され、個人はつねに完全な統制下におかれる結果となります。ことに共産主義は、人間や歴史を物質によって規定されたものとみる唯物論の哲学の上に立っていますので、人間の自由の否定は徹底的なものとなります。そしてさらに彼らは、資本主義社会から共産主義社会への移行は、ただ、

暴力革命にのみよる、と考えています。

キリスト教は、自由の上に立って平等を否定し、あるいは平等の上に立って自由を否定しようとする、この二つのイデオロギーの何れにも賛成しません。自由も平等も自己を絶対化してはなりません。人間の世界に絶対なものはありません。ただ不完全な自由と不完全な平等があるだけです。絶対なものは神のみです。ですから、この自由と平等を実際の場にあってどう相即させ、矛盾と弊害のより少い社会体制を、どのようにして実現するかという現実的な政治の課題を見つめるのが正しいと思います。

**問76** 第五の戒めは何を教えていますか。

**答** 「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」と教えています。

だれにでも親がいるということは、わたしどもの上に主なる神がおられるということを象徴しています。

事実、両親は子供に対して「神の代理」という意味があるのです。天の父である神は、彼ら

の手を通して子供を教育し、治めようとされるのであり、したがって、子は父母を尊び、敬い、従順でなければなりません。そしてこのことは、父母がキリスト教徒であると否とにかかわりありません。また、すべての親は、このような栄誉と使命を与えられていることを思い、それらしく養育してゆく責任があります。

ですから、神を無視して、自分が子に対して絶対的権限を持った者であるかのようにふるまう封建的両親や、その反対の自由放任的な両親はどちらもあやまりです。このようなあやまった両親に対しては、子は痛みを覚えつつ、神にとりなしの祈りをささげながら、神の御旨に従って生きるべきであります。終戦後、親と子の間のモラルがくずれて、新しい原則を見出しかねて悩んでいる現代にあって、わたしたちは一つの道標とならねばなりません。（エペソ六・一―四）

**問77**　家庭で親から信仰に反対された場合、どうしたらよいでしょうか。

**答**　信仰にはしばしば反対や迫害がつきまといます。しかし、それは神からの一つの試練であって、それによってかえって信仰は純化され、強化されてゆくものであります。わたしたちの

先輩の多くもそのテストをくぐりぬけてきております。へこたれてはなりません（ヘブル一二・一―一三）。

迫害のうちでも親の反対は、子供への愛情から出ているだけにつらくあり、苦手でありますが、しかしそこで屈しないで、一生けんめいに信じぬいてごらんなさい。そうすれば、そこは親ですから、子供がそれほど信じる宗教ならよいところもあるに相違あるまいと、次第に認めてくれるようになり、ひいては一応自分も研究してみようという気持を持つようにもなって、ついには、入信してくれる場合すらあるものです。

ですから、真理と信じるところに向かっては、つねに勇気と希望を持って励み、言葉と行いとをもって証しし、なお親のためにも祈りながら前進してゆかねばなりません。勝利は必ずあるものです。

**問78**　キリスト教になると、先祖の供養（くよう）はどうするのですか。

**答**　キリスト教においても決して先祖をおろそかにするものではありません。ただその尊ぶ精神と仕方が、仏教の場合とは異るのです。

仏教では供養といいますが、それは死者の霊に物を供えて、冥福を祈ることです。キリスト教では、生ける者と死ねる者の主であられる神のみ前で、先祖の姿を想起し、その精神に学び、その受けた恵みを覚えて感謝を新たにし、現在の家族のために神に祈るのです。このようなことを記念会とよんで適宜行ないます。

もし先祖が信者でなかった場合にも、このことは少しも変わりません。自分が入信したなら適当な時機に、丁重に位牌を寺にかえし、代りに写真をかざって記念会をするようにいたしましょう。ただ、家庭の中で自分だけが信者で、すべてをキリスト教式に革新することが困難な場合には、忍耐と希望をもって、一日も早く、革新の日が来るように祈るべきであります。

**問79**　キリスト教は国家についてどう考えますか。

**答**　国家とは、社会の秩序を守り住民の福祉に仕えるために作られたものであって、国家の主権は国民にあります。為政者と官吏はその与えられた権限を正しく行使し、公僕として忠実にそのつとめを果たさねばなりません。また国民は義務と責任をもって国政に参与しなければなりません。

しかし、国家権力はしばしばその使命と限界をこえて国民の自由を圧迫し、自己を絶対化して国民を道具化し、国家目的の下に隷属せしめようとする危険を持っています。

わたしたちは、かって、このような国家主義にじゅうりんされた、にがい経験を持っていますので、再びこのようなことのないように目をさまして、国家の運命に参与していなくてはなりません。特に現状においては、国家の力はひじょうに強大なものとなっていますので、民主的な国政の運営には特に関心を持っていなくてはなりません。（ローマ一三・一―七）

**問80**　第六の戒めは何を教えていますか。

**答**　「あなたは殺してはならない」と教えています。

すべての人の生命の主は神であります。神のみが生と死とを支配しておられます。ですから、ひとの生命であると自分の生命であるとを問わず、人間がそれを自由にすることは罪であります。神はわたしたちに生を与え、一定の期間この世で生きることをゆるされました。ということは、人間の生命と人生には必ず深い意味と使命が与えられているということです。神はいたずらに人間をお造りにはなられないからです。

ですから、わたしたちはどのような時にも、どのような人をも愛し、尊び、生きてその意味と使命を果たし得るように努めねばなりません。わたしたちは、「お前のような人間は死んでしまえ」と言ってはならないし、「わたしのような人間は死んだ方がよい」などと言わなくてもよいのです。

また、単に殺人だけでなく、他人を妬み、憎み、怒り、侮辱し、あるいは復讐の念を持ったりすることも、その人のいなくなることを願い、または存在の価値を無視することですから、ひそかな殺人であります。現代のオートメーション化した社会が、次第に人間を人格として尊重せず、単なる工場の一歯車か、組織の一細胞として取扱う人間無視の傾向を持っていることも大きな問題であります。

わたしたちは、この人間性の喪失へと、われわれをかりたてる現代の霊とも闘わねばなりません。（マタイ五・二一―二六、一八・一〇―一四）

問81　キリスト教は戦争をどう考えますか。

答　このことについては聖書は明らかな戒めを与えていません。しかし、弱少民族を征服する

ために戦争を用いたり、国際紛争を解決する最後の手段として戦争に訴えたりすることは、聖書の精神にてらし絶対に認めることができません。

また、今日の世界情勢にあっては、絶対的に悪であるような国は存在していませんし、大量殺戮兵器が極度に発達している以上、戦争は人類の滅亡という次元を異にした性格をおびてしまいましたので、一層、戦争と戦争準備を認めることができません。ことに日本は憲法によって戦争放棄を規定しているのであって、キリスト者はこれを守り、実施することに誰よりも熱心でなければなりません。（マタイ二六・五二）

問82　第七の戒めは何を教えていますか。

答　「あなたは姦淫してはならない」と教えています。

神は人間を男と女とに造られ、結婚の秩序を定めてこれを祝福されました（創世記二・一八―二五）。さて、結婚は一夫一婦でなければなりません。それは唯一の神に対して人格的でなければならないように、からだをゆるしあう程の人間関係もそうでなければならないからです。

わたしたちは、こうした一対一の男女関係の中で愛と誠実をつくすことによって、男は男と

して、女は女として造られ、社会の基本単位としての家庭が建設されてゆくのです。この秩序を破って誤った情欲をいだき、無軌道に走り、あるいは愛情のおもむくままに無節操に流れることは、神の創造の御旨に逆らうのみでなく、自らを傷つけ、破壊し、不幸になってゆくものであります。性道徳のルーズになった今日の世相の中で、キリスト者は清純な秩序を維持し、建設してゆかねばなりません。（マタイ五・二七―三〇、コリント第一、五・一―八、六・一五―二〇）

**問83**　夫婦の正しいあり方について教えて下さい。

**答**　夫婦において、まことの主は神であって夫でも妻でもありません。二人はともにこの唯一の主をつねに仰ぎ、主のもとに愛とまことをもって共同してゆかねばなりません。

その際、夫婦がキリストと教会の関係にたとえられていることを覚え、夫は男らしく妻を愛し、妻は女らしく夫に仕えてゆくことがたいせつであります。夫が妻に対して絶対的な権限をふるう封建的な態度や、平等の名の故に男らしさや女らしさを失う行きすぎた自由的なやり方など、いずれもあやまりであります。（エペソ五・二二―三三）

もし相手が未信者である場合も、あるいは、仮りに悪い夫または悪い妻である場合も、このことには変りありません。いや、その時こそ、最も主のみこころに従って愛し、仕えてゆかねばなりません。（コリント第一、七・二―一四）

また、夫婦は最も深い意味からいって、「神が合わせられたものであるから、人は離してはならない」ものです（マルコ一〇・五―九）。ですから、万一夫婦の間に問題が起こり、危機がおとずれた場合には、牧師に相談し、できる限りのゆるしと忍耐と希望をもって、解決に努力しなければなりません。（コリント第一、一一・一―一二、ペテロ第一、三・一―七）

問84　第八の戒めは何を教えていますか。

答　「あなたは盗んではならない」と教えています。

人間にはだれにも私有物というものがあります。それは、神がその人に与えられたものですから、尊重し、祝福してあげねばなりません。暴力をもって、あるいは巧妙な手段をもって他人のものを奪い、あるいは破壊することは罪であります。

むしろ、わたしたちは真に役に立つ限り隣人の利益をはかり、自分が人からこうしてもらい

たいと思うことを人にしてやり、さらに、貧しい者を助けるために忠実に働くべきであります。

ことに今日の近代的な産業機構の中にあっては、利潤の公正な分配について、あるいは社会福祉の充実のために、じゅうぶんに心を用いねばなりません。なお、このことは公共のものに対しても同じであります。（エペソ四・二八）

問85　キリスト教では富についてどう考えますか。

答　富は神の創造であり、よしとされたものであって、悪ではありません。物質軽視の思想はキリスト教から出たものではありません。また、神は人間にその管理をまかされました。ですからいっさいの富は本来神のものであり、神から貸与され、委託されたものであることを覚え、その管理に忠実でなければなりません。（マタイ二五・一四―三〇）

さて、その管理のしかた、富の使い方がたいせつであります。わたしたちはこれを悪く用いてはなりません。例えば、買収、わいろ、ばくちなどに用い、また不必要に浪費することなどは罪であります。

むしろ、神の栄光をあらわすために用い、また富をもって人を喜ばせ、人間関係をよくする

ために役立たせ、さらに正しくそして豊かに自分を養うために用いるように心がけねばなりません。このためにキリスト者は富に対し、その利用と増殖について、もっと積極的でなければなりません。（ルカ一六・九）

しかし、また富はマモン（偶像）になり、人間はその奴隷になる可能性を持っています。マモンとは富そのものが価値となり、追求の最終対象となることをさします。富は神ではなく神の被造であり、手段であって目的ではありません。最終の目的は神の栄光であります。誤って誘惑におちいらないように注意しましょう。（ヨハネ第一、三・一七―一八、マタイ六・一九―二四、ルカ一二・一三―二一）

問86　第九の戒めは何を教えていますか。

答　「あなたは隣人について、偽証してはならない」と教えています。

本来これは、裁判その他の場所で真実を愛し、正直に語り、告白し、隣人の名誉をできる限り守るようにつとめなければならないということであります。

しかしまた、だれに対しても愚かなおしゃべり、蔭口、悪口によって隣人を傷つけたり、じ

ゆうぶんにたしかめもしないで、うわさなどによって人を軽卒に非難したり、罪に定めたりしないこともこの戒めの中には含まれています。

「舌先三寸で人を殺す」といわれるように、人間は言葉で人を殺すことも生かすこともできます。ですからわたしたちは、人を傷つける言葉でなく、徳を立てる言葉を語るように努めなければなりません。（エペソ四・二五、ヤコブ三・二―一二）

**問87**　第十の戒めは何を教えていますか。

**答**　「あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべてのものをむさぼってはならない」と教えています。

これはまだおこないにはならないけれども、そのもとになる心の中に起こる貪欲という不正な欲求を戒めています。

人間の欲望というものは、際限のないもので、放置しておくと、たいへんな結果になります。ですからわたしたちは、敏感に自分の心の中に起こった罪深い思いに気づき、心に恥じ、表面に現れないうちから潔めを求め、罪の芽をつまなければなりません。そして、自分の心の

中が正しい思いにいつも満たされているように祈らねばなりません。（マタイ二三・二五―二八、ヤコブ一・一四―一五）

問88　キリスト者がこれらの戒めを全部守っているとは思われませんが、それでよいのでしょうか。

答　神はここにわたしたちがしなくてもよいことは一つも命じておられませんが、しかし、たしかに人間はひじょうに弱いので、聖人といえどもこれらを完全に果たすことはできません。ただ、わずかにこの服従の始まりを持っているにすぎません。それでよいはずはありません。

しかし、厳しさとともに慈愛にみちておられる神は、わたしたちがそこに言われていることに、わたしたちの生活を一致させようとまじめに努力するならば、完全の線には遥かに及ばなくてもその不完全を受け入れられるのです。ですからわたしたちは、キリストのゆるしに支えられて、自分の力の及ぶ限りまじめに努めなければなりません。（詩篇一三〇・三―四、ピリピ三・一二―一四）

問89　だれも完全に守ることができないのならば、なぜ神はこんな厳格な戒めを命じられたのですか。

答　第一に、わたしたちが自分の罪の深さを知って、心の目をさますためであります。もしこの戒めがなかったならば、わたしたちは何が罪であるかを知らなかったでしょう。

第二に、自分の罪が自分の力で除去し得ないものであることを知って、罪のゆるしとキリストによって与えられる義とをいっそう熱心に求めるようになるためであります。

第三に、終末の日におけるキリスト再臨の時、わたしたちを神の子の栄光あるからだに完全にきよめ、造りかえて下さる聖霊を熱心にこい求めるためであります。

第四に　終末の日のみでなく、現在においても、聖霊の導きによって潔められ、よいおこないを実行できるようになるためであります。

このように戒めは、もっとも深い意味では、わたしたちを自分のおこないによる救いではなく、キリストによる神の救いに向かわせるために与えられているのであります。（ローマ三。一九―二四、エペソ二・一―一〇）

問90　もし、罪を犯してしまった時は、どうしたらよいでしょうか。

答　ひとりで良心の呵責（かしゃく）に苦しんでいないで、キリストの赦しにすがらねばなりません。もし、どうしても心がおさまらず、不安な時は、牧師か尊敬する信仰の友に打ち明け、ともに祈ってもらうことがたいせつです。

しかし、一番たいせつなことは、キリストによる罪の赦しの言葉をはっきりと聞くことで、それは罪の赦しの説教をうけ、また、その見えるしるしである聖礼典にあずかることです。聖餐を受けることを通して、わたしたちは、自分の罪がたしかにキリストによってとりなされていることを知ることができます。こうして神とのやわらぎを与えられ、落ち着いた心をもって、犯した罪のつぐないにとりかかるのです。（ヨハネ第一、二。一―二）

問91　なぜ祈らねばならないのでしょうか。

答　すべてのよきものは、みな神から出てくるからであり、神はあらゆる窮乏の中から神に助けを求めることを欲し、求める者にそれを与えようとされるからです。

また、わたしたちはすべての賜物のゆえに神に感謝しなくてはならないからであります。こうして、神はわたしたちが絶えざる神との交わりと対談の中で、この人生を歩むことを命じて

おられるのです。このような実生活の中での祈りと応答の体験によって、神ともにいますということが確かにされるのです。

また、祈りによる神との交わりという霊的生活を豊かにもつものでなくては、特に今日のように多忙な、そして機械化された時代にあっては、神の子としていきいきと生きることはできません。信仰生活が枯渇しないように、わたしたちは祈りの時間を確保しておかねばなりません。

また、「心だに誠の道にかないなば、祈らずとても神や守らん」という歌がありますが、このような神との交わりを軽視した自己満足的な考えでは、いきいきした信仰生活はできません。

しかし、どうしても祈れない時は、牧師や信仰の友に祈ってもらったり、御霊が言いがたい歎きをもってとりなしの祈りをされていることを覚えて、その時を耐えぬき、早く祈れるように導かれることがたいせつであります。（ローマ八・二六―二七）

**問92**　どんなことを祈ってもよいのですか。正しい祈りを教えて下さい。

答　病気のいやし、家庭の幸福、仕事の成功などのこの世の幸福を祈り求めるのは人情であって、どの宗教でも同じであります。神はこのような祈りをもちろん禁じておられませんし、どのようなことでも卒直に申し上げて助けを求めることを命じておられます。

しかし、神はそれと同時に、いやそれより以上に、自己中心的な古い自分に死んで、新しく造られた神の子として、神の栄光と隣人のために祈る者であることを求められるのです。ですからわたしたちは、自分のために祈るよりも先に、まず神の御心の実現のために祈るべきであります。これが真に正しい霊的な祈りであります。

主イエス・キリストが十字架につかれる前、ゲツセマネで、「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」（マルコ一四・三六）と祈られた態度は、わたしたちの模範であります。このように、いかなる事でも神のみこころに服従し、み栄えの現れることを求めて、自分の思いに優先させるという精神にもとづいて、主イエスは次のような祈りを教えられました。これは「主の祈り」とよばれ、あらゆる祈りの典型であります。

天にましますわれらの父よ、
願わくは御名をあがめさせたまえ。
御国を来らせたまえ。

みこころの天になるごとく
地にもなさせたまえ。
われらの日用の糧を今日も与えたまえ。
われらに罪を犯すものをわれらがゆるすごとく、
われらの罪をもゆるしたまえ。
われらをこころみにあわせず
悪より救い出したまえ。
国とちからと栄えとは限りなく汝のものなればなり。
アーメン

このように、キリスト教の祈りには讃美、感謝、ざんげ、執り成し、祈願などが含まれるのです。（マタイ六・九―一三）

**問93**　「天にましますわれらの父よ、願わくは御名をあがめさせたまえ」とはどういう意味ですか。

答　祈りはすべて、神への呼びかけからはじめられます。「天にましますわれらの父よ」とは、神が地上にいるわたしたちを越えた超越者であり、また、わたしたちを作られた造り主であるということです。

この神がイエス・キリストを通してわたしたちに近くいまし、わたしたちの祈りに答えられるかたであり(**問15**参照)、そして神はわたしの父であるだけでなく、われらの父と呼ぶことが許されるのです。ですから、この祈りは互いに兄弟とされたものの共同の祈りなのです。

神の御名というのは、生ける神ご自身のことにほかなりません。この神をあがめることは、地上のさまざまな問題の中に生きるわたしたちが、全生活を通して生ける神を礼拝する生活を貫くことを祈るものであります。まことの神があがめられないとき、人間が尊ばれない結果になります。

実に、神の御名があがめられることこそ、第一の祈りであり、わたしたちはこの祈りが全世界をおおうようになることを願うものであります。

**問94**　「御国(みくに)をきたらせたまえ。みこころの天になる如く、地にもなさせたまえ」とはどういう意味ですか。

答　イエス・キリストにおいて、神の国（神の支配）はすでに見えないすがたで、この地上に開始されています。（問40参照）しかし、なおこの神の国は、人間の世界に完成されておりません。神の国は、現実の苦難とたたかいの中での、ゆるがぬ希望であります。そして、その神の国の見えるしるしとして、地上に教会が建てられています。この教会が、からし種の如く成長することが、御国の完成への道なのです。

御国がくるためには、神のみこころが求められねばなりません。神の意志と御計画は、キリストにおいて、すでに実現されているのですが、その神のみこころが、この世で実現されることをさまたげている罪と悪があるからこそ、この祈りが真剣になされねばならないのです。

そして、この祈りを地上で担うところに地の塩としての教会のつとめがあるのです。

問95　「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」とはどういう意味ですか。

答　最初の三つの祈り（御名、御国、みこころ）は、すべて神に関する祈りでしたが、第四の祈りからは、わたしたちのための祈りであり、しかも身近な、実際問題の祈りであります。

まず、神の御名があがめられ、御国とみこころが求められた後、わたしたちの地上における

具体的な生活の祈りがなされるのであります。神はわたしたちの地上の生活を重んじられるのであります。

人間をこの地上に創造された神は、また、わたしたちの肉体と生命とを支え、守られます。わたしたちが生きるに必要なものを神がすべて与えて下さることを信じて、日毎に祈り求めるのです。そこにこそ感謝の生活が生まれるのです。

この祈りは、単に、個人的な私生活の祈りであるだけでなく、共同の祈りであり、教会の祈りであります。

わたしたちがこの祈りを、日毎に、真実に祈れるかどうかによって、神の生ける働きを信じているかどうかが問われるのであります。

**問96**　「われらに罪を犯す者をわれらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」とはどういう意味ですか。

**答**　この祈りは罪をゆるされた信仰者がなお、現実の罪とたたかいながら生きる時の切実な祈りであります。

わたしたちは日常生活の中で、あらゆる不信仰や怠惰、肉体的無規律、また憎しみ、ねたみ、争いなど、神と人とに対して多くの罪と過ちを犯しています。なかでも、わたしたちは他人の罪をゆるそうとしないものです。そこに、わたしたちの最も深い罪があるといえましょう。ですからキリストはこのように祈れと命じられたのです。

わたしたちはお互いの罪を日日ゆるしあう努力をつづけることによって、キリストによる罪のゆるしの恵みをいよいよ深く知るのであります。（マタイ一八・二一―二五）

**問97**　「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」とはどういう祈りですか。

**答**　この祈りは決して弱気の祈りではありません。むしろ、わたしたちを知りつくされたキリストの愛のあらわれであります。

わたしたちの信仰生活には、くりかえし試みや誘惑がおそってきます。それらは、わたしたちを神から離れさせようとする、巧妙なサタンの働きです。

わたしたちは自分の信仰の力をためすために、みずから誘惑を求めたりしないで、素直に「こころみにあわせないで下さい」と祈らねばなりません。

現代の社会には、わたしたち一個人の力を越える大きな悪が根強くはびこっています。なかでも戦争は最大の悪です。歴史を支配される生ける神を信じるわたしたちは、失望や妥協をしないで、終末の救いの完成を目指しつつ生きるのであります。

**問98**　主の祈りをするときにたいせつなことはどういうことですか。

**答**　宗教改革者ルターは、主の祈りをさして「最大の殉教者」と申しました。それは主の祈りが無造作に、ただ、くりかえされ、唱えられるだけで、魂の奥底から真実に祈られず、また、信仰生活において真剣に生き抜かれていないことに対する厳しい指摘であります。

主の祈りは、地上におけるわたしたちのすべての祈りの模範であり、教会の祈りの典型であります。

わたしたちは、一つ一つの祈りの深い意味を考えながら、真剣に祈るようにいたしましょう。（問91・92参照）

問99　祈りの終りに、「主イエス・キリストの御名(みな)によって祈ります。アーメン」といいますが、なぜですか。

答　それは、主イエス・キリストがわたしたちのすべての心配と困窮と罪をにない、わたしたちの祈りを父なる神にとりなして下さるかたであるからです。

このキリストによって罪深いわたしたちの祈りは、どんな小さい祈りでも確実に神のもとに達するのであって、もしキリストがおられなかったら、祈りは空しく返ってくるだけでありましょう。それで「主イエス・キリストの御名によって祈る」と言います。また、「アーメン」とは「確かにその通りである」という意味のヘブル語で、口先だけでなく、また不安をもってでもなく、確かな信頼をもって祈っているということを表わすために唱えるものです。（ヨハネ一六・二三―二四）

問100　祈りは必ずきかれますか。

答　キリストがいらっしゃるのですから、祈りは必ず神にきき届けられています。そして神は

必ずそれに対して答えを与えて下さいます。わたしたちはこのことを信じて祈ることがたいせつで、疑いながら祈るのは不信仰です。

それでは、どんな形で答えられるでしょうか。ある場合には、こちらで望んだとおりの答えが与えられるかも知れません。しかしまた、違った結果が与えられるかも知れません。それは神御自身が最も良いと思われたものを与えられるからであって、たとえ、それがこちらであらかじめ考えていたことと違っていても、祈りがきかれなかったと思うことはまちがいです。

結果はまったく、信頼をもって神にゆだねなければなりません。そして与えられるものは何であれ受け入れる心の用意を持ち、その意味を理解し、その深いみこころを喜ぶことができるように努力せねばなりません。（マルコ一一・二四、コリント第二、一二・七―一〇、ペテロ第一、五・七）

**問101**　祈禱会とは何ですか。

**答**　教会に集っていっしょに祈ることで、ふつう週間の夜または早朝定期的に行なわれます。わたしたちはひとりで室に閉じこもり、神に祈る時を持たねばなりません（マタイ六・六）。

しかし同時に、互いに集り、心を合わせていっしょに祈る時も持たねばなりません。なぜなら、神は「我が父」であるだけでなく「我らの父」でいらっしゃいますし、わたしたちがそのように呼び、また心を合わせて祈ることを求められるからです（マタイ一八・一九―二〇）。

祈り合いの中で力を与えられるだけでなく、一つの共同の課題を指摘され、その課題への熱心を燃やされ、またよい導きをいただきます。わたしたちはこのような祈禱会を重んじ、盛んにしなければなりません。それは、教会生活をより充実したものにするために不可欠なものなのです。

よく、一人でなら祈れるがひとの前では祈れないという人がおりますが、それは、まだ自意識にとらわれている証拠です。早く自由になり、祈りの交わりができるように成長しなければなりません。また、そのような祈りは一度にできるものではなく、だんだんに成長してゆくのです。

このように祈禱会は、祈りによる霊性と人格形成の修練道場でもあります。畳の上の水練ではいけません。まず祈禱会に出席して共に祈ってみることがたいせつです。

**問102**　献身とは何ですか。

答　献身とは、神の栄光のために自分をささげ、犠牲をささげるすべてのわざをさしているのです。ですからキリスト者は全生活が常に神への献身でなければならないのです。

しかしこのことは、もっと狭い意味ではある特定のわざのために身をささげ、時間をささげ、奉仕することをさしています。牧師になることもその一つであります。教会学校教師になることもその一つです。また恵まれないひとびとのために休暇をささげることもそうであります。献身の場所はいたるところにあります。その場所、その仕事を見出し、神の召しに答えるようにいたしましょう。（ローマ一二・一―二）

問103　人生の最後の目的は何ですか。

答　この世とこの世にあるものはすべて、やがては過ぎ去ってゆきます。そこには永遠なるものは一つとして存在しません。永遠なものはただひとり神のみであります。（ペテロ第一、一・二四）

ですから、たといどんなに深くこの世のことを知り、幸福を味わっても、それだけではついには空しさだけが残るのであります。一回限りの人生を、このような空しさのために費すのは

愚かなことであります。わたしたちは全人生を貫いて永遠なる神を求め、不滅なる神の栄光のために仕えて生きねばなりません。（ピリピ一・二〇）

このような生き方をする時にこそ、はじめてわたしたちのはかない人生は輝かしい光彩を与えられ、いやしい土の器にも宝が盛られていくのです。ただ神を知ることと神の栄光をあらわすことのために生きましょう。（詩篇九〇、マタイ二四・三五、ヨハネ第一、二・一七）